

24

コミュニケーション力を高め個が生き豊かな学級文化を創りあげる方策

— 小学校の教科学習の中でコミュニケーション力を高めることができるグループ学習のあり方 —

三木 史子 (聖母被昇天学院小学校)

I. 研究目的

今を生きる子ども達は、友達と向き合い自分の思いを表現することに対し苦手意識をもち、「友達に助けられ自分が生かされる」という感覚も薄らいできているように感じられる。そこで、協働活動を基盤にしなが、そのなかで子ども同士が直接に向き合い、時には対立しながらも良い人間関係をつくるためのグループ活動のプログラムを提案する。筆者の先行研究では「ジグソー学習」の形態をとることにより、「コミュニケーション力」に効果があると4年生の実践より結論付けることができた。高学年・低学年においても、同様の効果があるのかを、検証することを目的とする。

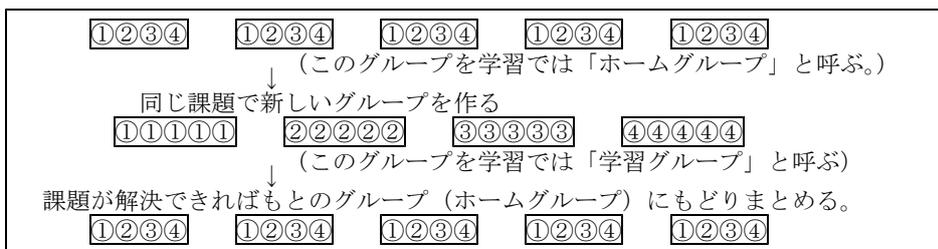
II. ジグソー学習とは

児童が最もコミュニケーション力を必要とし、また一番ストレスを感じる学習が、グループ学習ではないかと位置づける。ともすると、始めからまとめる最後まで何時間も同じメンバーであることにより、コミュニケーションをとる必要を感じず人任せになったり、強い者が始めから仕切りその力に押され、自分の考えを伝えないまま終了してしまったりすることになる可能性が高い。そこでグループ活動を「ジグソー学習」という学習形態を基盤に活性化することでコミュニケーション力をつけることができないかということである。

(1) 「ジグソー学習」の形態

- ① 学級集団を小集団に分け、大きなテーマの下一人一人課題が与えられる。
- ② 同じ課題を持つもの同士、グループを新たに作り、課題を解決していく。
- ③ 解決された課題を、始めのグループに持ちかえり、グループのメンバーに正しく教える。

この学習形態を図式的に示すと、以下のようになる（注数字は学習者を表す）。



この形は「ジグソー学習」の基本型である。課題の内容にあわせ形態を変えて行くことは可能であるが、筆者は、この基本型の実践が児童にもやり方が理解しやすく、また授業者の経験によらず、実践しやすい型だと考え、今回も低学年高学年ともにこの型を使い実践していった。また教科の特性にも関わらずどの教科にも利用できることがポイントである。また以下の3つのグループの位置づけを意識することは、実践していく上で大切である。

① ホームグループ

メンバー一人ひとりが学習グループで得た情報を正しく伝えまとめていく。グループのメンバーが学習グループで感じた困ったことを、聞きあう。

② 学習グループ

ホームグループにて与えられた課題で同じ課題を選んだメンバーが集まり解決していく。学習グループで解決した課題を正しくホームグループに持ち帰る。

③ リーダー会議

特にホームグループのリーダーの集まりを指す。リーダーとしての役割で困っていること、またメンバーが困っていることで他のグループに協力をしてもらいたいことについて話し合う。

(2) ジグソー学習における価値（筆者の先行研究より、以下のことが有効と考えられる）

1. 児童がお互いを好きになる。
2. 自尊心が高まる。
3. 友達から学ぶことができるということを実感

する。 4. 相手の立場に立って考えることができる。 5. 学習者が主体的に学習を進める。 6. 学習者の学習に対する責任感が向上する。 7. リーダーの成長

(3) 学習をより効果的にしていくための日々の活動

- ・朝の会のスピーチ：安心して話すことができる教室環境を作る。応答は2往復させる。
- ・メモ：常にメモ帳を持ち、必要なこと聞き取ったことについてメモをとる習慣・力を身に付けさせる。

Ⅲ. ジグソー学習における課題

(1) 読解力

伝統的な一斉授業の形態では隠すことができたかもしれないが、ジグソー学習では、一人ひとり役割をもち課題解決していかなければならない。そのため、時には他の仲間からじれったさや非好意的な評価を受ける可能性がある。

(2) リーダーの存在

だれもが、リーダー（まとめ役）という役目を担うことにより、より成長していく。今まで「まとめ役」など、「いつも決まった子が行い、自分には関係ない」と意識を持っていた子どもにとって、必ず順番でしなければならないことにより、課題への意識が高まり、責任感も大きくゆさぶることになる。話しを聴かずに勝手なことをしている友達の態度、意見が出ないときのつらさ、まとまらない苛立ち、まとめ役を通り越し先々と勝手に話しを進めて行かれる時のくやしき。一方、話し合いの進め方で、困っている時、友達のアドバイスで前へ進めることができた等々のことは「まとめ役」となって理解できることである。しかしこの「まとめ役」は課題でもある。つまり、別の課題で今度はまとめ役ではない時、チームの一員として、「まとめ役」を支える立場として振る舞うことができるかどうか。また輪番制でまわってくることに對し、得手不得手もあり、能力差もあると考える。その場合、周りの「まとめ役」に對しての対応である。その対応いかんでは、自信をなくしてしまったりすることにもなり得ると考えられる。また、輪番制を全面的に受け入れるのではなく、徐々に慣れるにつれ「この課題なら、責任をもってできる」という意識の向上も次の段階では大切なことである。「まとめ役」となり葛藤を繰り返す、この「繰り返し」が学習者をより強く育て、筆者のいう「個が生きる学級」を作っていくと原動力になると考えている。

(3) 注目すべき学習者

成績が特別よいと言うわけではないが、クラスの中で敵がない、しかしあまり自分を表現することをせず、「まとめ役」については「できるならば、別の人にやって欲しい」という意識がある、そのような児童にスポットをあてたい。得てしてこのような児童は、実際事がおこっても、担任の注目児童ではなく、むしろ「見過してしまおう」児童であることが多い。しかし、こういう児童は、概して敵がないため、周りからは「受け入れられやすく」穏やかにことを進めて行くことができるのではないかと考えるからである。

Ⅳ. 実践報告

(その1) 6年生社会科学学習よりー歴史学習の課題よりー 1学期 室町時代のくらしと文化を調べよう 全8時間
2学期 明治時代のくらしと文化を調べよう 全10時間

(1) 事前学習として

総合的な学習の中で「新聞記事について、内容をよみとろう」という活動を下記のように行い、グループ学習の形態を学習させた。

- (ア) ホームグループで選んだ新聞記事をそれぞれ読み取り感想を出し合いグループとしての意見をまとめる。
- (イ) そのまとめた意見を学習グループに分かれ、正しく伝え、感想を出し合う。
- (ウ) 自分のグループの感想意見がどのように受けとられたか、話し合った結果をホームグループに持ち帰り正しく伝える。

(2) グループの形態

AからFまで6つのグループに分ける 1学期2学期を通し両方の形態を経験させる。

グループ	1学期	2学期
A・B・C	わかれず、活動	ジグソー学習形態
D・E・F	ジグソー学習形態	わかれず、活動

(3) 毎時間の取り組み

- ・リーダー日記を付ける。
- ・ホームグループにもどり学習グループの進捗状況を報告（5分程度）

(4) 発表からその後の活動

- ① 発表後、グループの発表資料に、一人ずつ発表時にとったメモを参考に、感想やもう少しこうすればという

アドバイスカードを付けていく。このカードを参考に、グループで、再度資料に付け足していく。

② その後、新たな学習グループを作り、ホームグループの発表について再度話し合う。

- ・発表後付けたした資料についての説明
- ・自分たちのグループの発表についてどうであったか聞きあう。
- ・ホームグループから「聞いてきてほしい」という質問を持ち寄り、意見を聴く。

(5) 学習を終えて(学習者の意見・感想より)

① リーダー会議より

☆ジグソー形態での学習をした時に感じたこと

- ・達成感があり、前回よりも最後までチャイムがなってもまとめていた。意見も言いやすかった。
- ・一人ひとり集中でき自立した活動ができた。ホームグループに帰ったときはリフレッシュできた。
- ・自分が調べた記事をしっかりと書くことができ、自分の思いが書けた。
- ・役割を任せることが気持ちの上で大きかった。
- ・責任が重くなり、だれかがやってくれるという気持ちはなくなった。

☆分かれな学習形態をした時に感じたこと

- ・仕事が「人任せ」になり進まなかった。全員そろってしていくのが難しい。
- ・自分ひとりが同じ事(字を書くこと)ばかり押し付けられた。役割分担が特に必要
- ・リーダーが、情報をしっかりとわかっていないと難しい。そのリーダーから調べる内容についてしっかりアドバイスが必要と感じた。
- ・4人で話し合い全員が理解することが大切と実感した。

② 作文より

1学期(1つの形態しか経験していない)

☆グループが分かれな学習形態を経験した学習者より

「意見がぶつかり合ったときに相手の意見自分の意見が分かれたときどちらの意見も取り入れることが難しいことを、社会の時間に学びました。」

「チームはぜんぜんまとまっていないし、新聞もなかなか進まない。遊んでいる人もいる。自分も何もやっていないような気がする。しかしいろいろな相談ができることがグループ活動のよいところで、ちょっと、班長になってみようかなと思うことができた。」

☆ジグソー学習形態を経験した学習者より

「一生懸命調べた資料を持ち寄って自分の担当を話し合う。新聞を書く時は一致団結できた。ホームグループは、第二の家族のよう、共に仕上げていく絆や段取りよく協力する力居心地の良さを感じた。」

「私は自分の意見を通したがるのでグループ活動は苦手だ。自分の意見がなかなか通らないからだ。しかしそれは、その人の意見のほうがいいからだ。そしてその意見のほうがいい新聞ができるのではないかなと思う。グループ活動で友情が前より、いっそう深まったのではないかなと思う。」

2学期(両方のグループを経験して)

- ・ホームグループはそれぞれのチームの意見を取り入れ新たな出発点を見つけることができる。単独では、どうしても幅が狭くなる。
- ・分かれたほうが、情報が入りやすく、いろいろな人と接することが多い。早く人の意見を理解できるようにがんばりたい。
- ・班長という役割を持ち団結することが大切とわかった。少し分かれたほうが、より分担を確実にすることができる。
- ・リーダーをしていて時にはなにかまはずれにされたりしました。でも、傷つけられても、全体に一人は、何かしゃべってくれたりしました。

(発表後、新しい学習グループに分かれた話し合いでは)

- ・「問題点はあった？」とたずね、意見やアドバイスをメモ帳にかいた。こうすることによって、いろいろな具体的な意見を聴きだし、問題点を改善していくことができるということがわかった。みんなの具体的な意見を聴くこと、また言うことが大切なことだと分かった。
- ・自分が任されたところをやる責任感を学んだ。まとめる大変さがよく分かった。班の代表として、他の班にきちんと伝えることができた。他の班の意見やだめだしを聴くことができた。一つの班でするのは、役割分担が難しかった。
- ・グループの発表資料の個々の意見をつけたことでは、話し合い材料になり、練り直して書き足したりする資料となった。また、その後の各グループの意見を持ち他のチームに自分のチームの話し合いでは、責任を持ち自分のチームについて報告、メモを取り、しっかりまたホームグループにて報告する個々の役割責任を実感した。

(その2) 2年生 国語科学習より(協力校 四天王寺学園小学校) 一図書館たんていだん 全7時間

(1) 形態 ジグソー形式

ホームグループ→ 学習グループ →ホームグループ
 課題に分かれ調べる 解決した課題をまとめ発表。
 班の発表でよかったところをメモ書きする
 学習グループの課題：図書室の地図 本の種類 コーナーの内容 コーナーの説明 本の探し方

(2) 実践の中で

① 学習グループの約束を確認する

「ホームグループに帰ったときに一人ひとり調べたことがいえるようにしよう」この約束を実行するため、チームリーダーより、メモ書きをする用紙が必要と提案があり、配布する。

② ノートにその日のすること・グループの形態を書き確認する。

(3) 学習後の児童の作文より

「グループで集まったときの勉強をもっとしてホームにもどったときに自分で調べたことをしっかり言って役に立てたらいいなと思いました。」

「ジグソーは自分でわからないことをほかのグループの子が教えてくれたり、わたしがほかの子に教えてあげたりしたので、ホームグループの子も勉強になったと思います。」

「みんなできょうりよくするとこんなにすてきなものができると知りました」

「いつもとちがうはんの子が集まったので、知っていることを言い合って、それが本当か図書室にもしらべにいて、ホームに帰って発表するときもしっかりできました。」

VII. まとめ

ホームグループ・学習グループにわかれての学習は、学習者同士の学びあい助け合いの態度を培うことに有効であり、低学年であってもジグソー学習を基軸としたグループ活動は、可能であり同じ様に効果があると実感した。

① 自分が責任を持って、書き上げるスペースがあり、それに力を入れることができる。

② 発表も、学習グループのメンバーで積み上げてきたことを発表するため、自信を持ち発表できる。また、自分のホームグループの発表が終わっても、学習グループで調べたことが、すべてのチームにかかわっているので、興味を持ち発表も聞くことができる。

③ 発表を聞きながら、内容や感想をメモ書きし、そのことが学習にとって大切であり、そのメモ書きを参考に次の学習に生かせることができることを実感させることができる。

と考える。

しかし、以下の点が課題である。

① 教科としての質の高まりについてはどうであったか。特に6年生の社会では知識としての定着も重要なことである。「はてな？」と思えることを相手に追求していく。それにより、学習も活発化する。6年生の作文で「D班の発表で意外なことが分かり、当時の人々の考え方が気になり、今度調べて見たいです。」とつながる感想があった。また、他の班からの質問で、再度練り直して詳しく調べ直す場面もあり、コミュニケーションの高まりから知識としての質の向上へとつなげていくことができると考える。今後調べた資料を基に、2つの時代の比較をホームグループでし、学習グループで持ち寄り話し合わせることを考え、知識の定着を図る。

② 課題の内容である。今回は6年生では、「くらしと文化」2年生では「図書館たんけん」どちらも、学習者の実際の生活に結びつけやすく、難解な課題でないことである。つまり学習者の能力に関係なく「協働」により解決できることであり、課題に「正解 ○ ×」があり評価されるのではなく、ストレスなく取り組める課題の提示が重要と考える。

③ 「対話ごっこ」に終わってないかという、教師の見極めである。対話が積極的にできているように見えるからといって、教師が満足していないかである。特に筆者は「対話」の高まりではなく、「対話」や「協働」からくる「互いの心の揺さぶり高まり」を課題としている。そのため教師が「コミュニケーションが深まった」といえるイメージを持てているか、なにを持って「コミュニケーションが深まった」とその学級ではいえるのか、活動後、検証の積み重ねが必要である。そのためには日々学習者が学習の記録をとったり、話し合いではメモが書きをしたり、その中で一言感想を常に書かせていく。そのことで学習者の思いや心の変化を見取ると同時に学習者も意識させていくことができると考える。

参考・引用文献

エリオット・アロンソン著、「ジグソー学級」, 1986年, 原書房

金本良通編著, 「表現力・コミュニケーション能力を育てる算教授業」, 2012年, 明治図書

水戸部修治著, 「『協同的学び合い』をつくる言語活動」, 2012年, 明治図書